第4室　香木･計量器　展示解説

N-123　大桝（おおます）

N-124からN-128までの一升桝(いっしょうます)と一具で法隆寺に伝来したものです。スギ材を用い、口縁の四方を竹貼りにした、いわゆる竹伏桝（たけぶせます）です。容積は５升２合８勺（9.521 ﾘｯﾄﾙ）で、他の一升桝のほぼ５倍に当たり、五升桝の可能性が高いと考えられます。銘文（めいぶん）などは全く認められませんが、室町時代の製作になると考えられます。

N-124～128　一升桝（いっしょうます）

室町時代に法隆寺で用いられた一升桝５口です。容積は８合２勺（1.472 ﾘｯﾄﾙ）から１升４勺（1.87ﾘｯﾄﾙ）までと様々ですが、いずれも一升桝として用いられました。中世には今と違い、各荘園や領主、あるいは寺院内部において、同じ一升桝でも様々な容量を持つ桝が使用されていたことが、これらの桝によっても具体的に示されます。それぞれには康正２年(1456)、長禄３年(1459)、文明６年(1474)などの年紀や、「観音講桝（かんのんこうます)」、「地子桝（じします)」などの用途を示す刻銘（こくめい）が見られます。

N-112　栴檀香（せんだんこう）
N-113　白檀香（びゃくだんこう）
N-114　沈水香（じんすいこう）

インドから東南アジアにかけての熱帯・亜熱帯地域に生える樹木には芳香を放つ樹脂を出すものがあり、これを香木（こうぼく）といいます。香木は日本には産出しないので、舶来品が用いられました。仏教の礼拝（らいはい)・儀礼においては香を焚（た）くことが欠かせないので、香木は仏教の伝来とともに伝わったものと考えられます。そのような事情により、古くから寺院には香木が収蔵されており、法隆寺においても栴檀香、白檀香、沈水香などが伝えられてきました。

ビャクダンの材木である栴檀香と白檀香には、ササン朝ペルシアのパフラヴィー文字による刻銘（こくめい）やソグド文字の焼印（やきいん）があり、刻銘は貿易に関わった人の名前、焼印は何らかの単位であろうと考えられています。すなわち東南アジア辺りで産出した香木が、ソグド人やペルシア人によって中国・唐に運ばれ、それがさらに日本に伝わったというような貿易活動がうかがえるのです。

また、ジンコウの朽木（くちき）である沈水香（沈香）は、朽木らしい独特の形状を呈しており、仏教絵画にはこうした沈香を捧げる様がしばしば描かれています。

N-121 青磁四耳壺（せいじししこ）

丁子香（ちょうじこう）の容器として用いられてきた壺（つぼ）です。肩の部分に「仏」などの墨書（ぼくしょ）があり、天平19年（747）に作成された法隆寺の寺史・財産目録である『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳（ほうりゅうじがらんえんぎならびにるきしざいちょう）』に記される「仏分」（仏・菩薩〔ぼさつ〕の供養〔くよう〕に用いられるもの）の丁子香 84 両を納めた容器と考えられます。来歴が明らかな世界最古の伝世陶磁器として名高い品です。中国・江南（こうなん）地方の青磁であり、丸みをおびた軽快な器形から、唐代前期に製作されたものと考えられています。

N-115-1　青木香（しょうもくこう）

インド北部のカシミール地方に自生するキク科の多年草・モッコウの根を乾燥させたもので、薬や香材として用いられました。『法隆寺献物帳』（ほうりゅうじけんもつちょう。N-5）に記される、聖武天皇の崩御（ほうぎょ）に際し法隆寺に献納された遺愛品の一つとして伝えられてきましたが、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳（ほうりゅうじがらんえんぎならびにるきしざいちょう）』には青木香が複数記載されており、それらを含んでいる可能性が高いと思われます。

N-115-2　草花銀絵漆皮箱（そうかぎんえしっぴばこ）

青木香（しょうもくこう）を入れていた容器です。動物の皮を木型（きがた）に当てて成形し、漆を塗って固める漆皮の技法で作られています。表面には銀色の絵の具・銀泥（ぎんでい）で草花の文様（もんよう）が描かれていますが、現在ではかなり見えにくくなっています。

N-83　紅牙撥鏤尺（こうげばちるのしゃく）

天平尺の一尺（約29.7㎝）のものさしで、上半分を５区に区画して、ものさしの目盛（めもり）としています。撥鏤とは、象牙を紅・緑・紺などに染め、表面を彫って、文様（もんよう）を白く表す技法のことです。中国・唐の時代に行われた技法で、正倉院宝物と法隆寺献納宝物の中にのみ、古代の遺例が見られます。

ここでは象牙の表面を紅（あか）く染め、宝相華（ほうそうげ）や鴛鴦（おしどり）を線刻しています。ただし線彫りは浅く、彫り溝が褐色に着色されるなど、正倉院宝物の作例とは異なるところも見られ、日本で製作されたものと考えられています。